平成23年度　普及活動成果集

めざせ！！

元気な担い手

もうかる農業

「農事組合法人　小野谷の郷」　タカナ収穫作業風景

平成24年3月

福岡県飯塚普及指導センター

目　　次

1　平成 23 年度気象･農業生産の概況

(1)気象概況･･ 1

(2)農業生産の概況･･････････････････････････････････････ 2

2　普及活動の主な成果

(1)「農事組合法人　小野谷の郷」が誕生･････････････････････ 5

(2)地域を担う新しい農業者の育成を目指して　･････････････････ 6

(3)高温耐性新品種「元気つくし」の面積拡大と安定生産･････････････ 7

(4)実需者の求める高品質の「ちくしＷ２号」を目指して･････････････ 8

(5)大豆の安定生産技術の確立　･････････････････････････････ 9

(6)直売所の「安全・安心」農畜産物生産の確立･･････････････････10

(7)イチゴの早期作型の重点化で収量が向上･･････････････････････11

はじめに

平成 23 年（１～12 月）は、当管内では自然災害が少ない年でしたが、露地栽培の果樹では春の低温・乾燥、初夏の低温、日照不足、麦では６月の連続降雨により影響を受け、収量の低下した作物がみられました。東北大震災、原子力発電所事故などの影響により青果物の流通も混乱し、長い期間尾を引く結果となりました。世界の政治・経済の変革の中で、石油資源や食料の高騰がすすみ、今後の農業経営に大きな制約要素となっています。

このような情勢の中、飯塚普及指導センターは飯塚地域担い手・産地育成総合支援協議会の市町・農業委員会や JA 等団体をはじめ、指導農業士、青年農業士、女性農村アドバイザーと連携して普及活動を展開してきました。特に、新規就農者確保・育成については、農業関係高校、農業大学校と連携し新農業人応援会議を推進活動の核としてきたところです。

普及指導センターは「めざせ！！元気な担い手　もうかる農業」をスローガンとして、次の２つの重点事項に取り組んでいます。

１　経営体の育成

- ○　親元に就農する新規就農者の確保・育成
- ○　大規模個別経営体、集落営農組織を対象に法人化、水田農業の規模拡大、園芸作物複合経営の推進
- ○　雇用労働力を活用した大規模な企業的複合経営の推進
- ○　認定農業者の経営改善支援

２　安全安心な農畜産物の供給と交流の促進

- ○　水稲「元気つくし」、小麦「ちくしＷ２号」、イチジク「とよみつひめ」等新品種の普及、栽培技術確立
- ○　イチゴ、ブロッコリー、アスパラガス、トルコギキョウの生産性向上
- ○　耕畜連携による飼料用米・稲発酵粗飼料の拡大、和牛素牛の産地化促進
- ○　農畜産物直売施設の生産履歴 100%記帳・提出、減・減栽培認証の推進

平成 23 年秋、農水省は持続可能な力強い農業の実現の戦略を発表しました。青年の就農意欲の喚起と就農後の定着、女性の能力の活用、農地集積の推進が核となっており、地域農業の合意形成が一層求められてきます。関係機関や農業者と連携して取り組む所存です。今後ともご理解・ご支援をよろしくお願いいたします。

この普及活動成果集は、平成 23 年度の主な活動成果を取りまとめたものです。
また、主な表彰、普及指導員調査研究等を掲載していますので、ご活用をお願いいたします。

平成 24 年３月

飯塚農林事務所　飯塚普及指導センター
センター長　山本幸彦

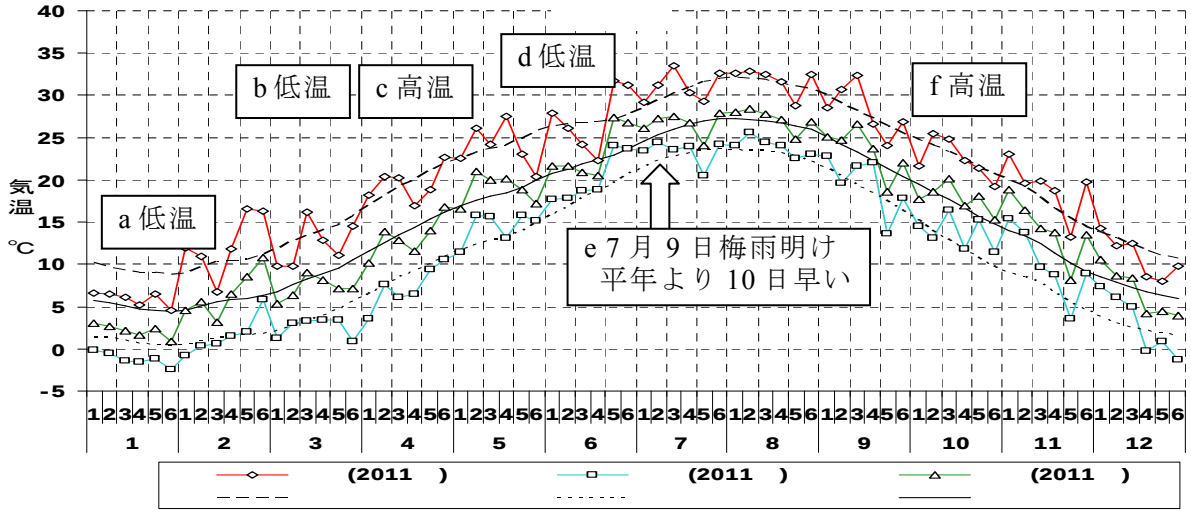
1　平成 23 年度気象･農業生産の概況

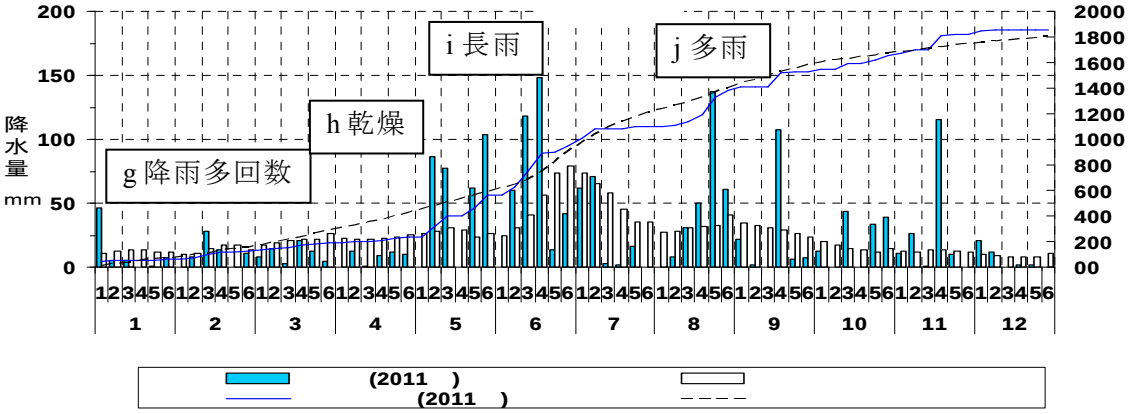
(1)気象概況

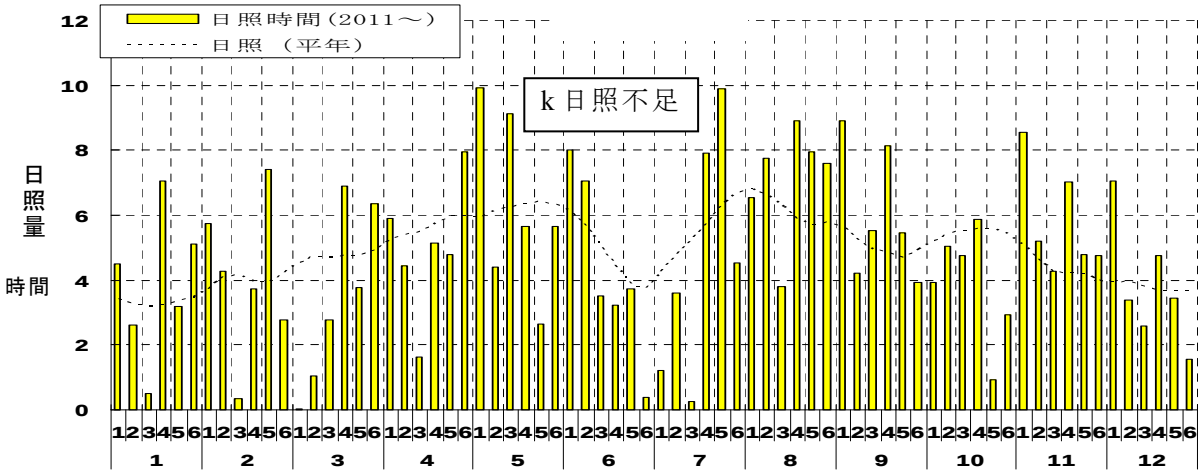
23　　1　　3　　4

6　　9　　10

11







（2）農業生産の概況（P1の図参照）

（麦、イチゴ、ブロッコリーは平成 22 年播種、定植）

＜普通作＞

○平年並の収量であった水稲

早生品種の分げつが梅雨期の日照不足(k)により抑制されたものの、7月の好天により生育が旺盛になり、出穂期以降の台風接近による大きな被害もなく、成熟期の天候がおおむね順調に経過したことから、収量・品質とも平年並みとなりました。その結果、福岡県の収量は 503kg/10a（作況指数 101）、筑豊地区は 486kg/10a（作況指数 100）となりました。近年被害の出ていたフタオビコヤガやウンカ、コブノメイガ等の虫害の発生は少なくなりましたが、いもち病の発生が多く、一部の地域で縞葉枯病の発生も見られ、病害発生の多い年となりました。

○収量、品質ともにやや低かった麦（平成 22 年播種）

播種は、11月中旬から始まり、当初は順調でしたが、12月は降雨が多く、一部の圃場で播種ができませんでした。播種後の出芽は順調でしたが、1月から3月は、降雨(g)と低温(a)の影響で中間管理が十分に出来なかったため、茎数は平年より少なくなりました。出穂期以降は低温が続き生育が遅れ、また収穫期の降雨により収穫ができない圃場がありました。収量及び品質については、登熟不良による粒の充実不足で、収量、品質ともやや低くなりました。

病害虫は、うどんこ病、赤かび病等の病害の発生は少なくなりましたが、一部の圃場で、タデ類やスズメノテッポウ等の雑草の発生が多くなりました。

○収量がやや多かった大豆

例年より早く7月上旬に梅雨明け(e)して以降は乾燥が続き、播種が順調に行われ、7月中にほとんどの圃場で播種は終了しました。播種後の出芽は、乾燥による発芽不良で一部播き直しとなった圃場もありましたが、全体的には順調でした。その後、盆過ぎの大雨(j)により、一部圃場で湿害があったものの、生育は比較的順調に推移しました。開花後も気温は平年並で経過し、適度な降雨もあり、台風の影響も少なく、平年より収量がやや多くなりました。

病害虫の発生は全般的に少なく、ハスモンヨトウがやや多かったものの、カメムシ類の被害は少なくなりました。一方で、アオゲイトウ、ヒロハフウリンホウズキやアサガオ類等の雑草発生が問題となりました。

＜野菜＞

○年内の収量が向上したイチゴ（平成 22 年定植）

10 月以降の気温が高く、早期作型は生育が旺盛になって２番花房の花芽分化が遅れました。逆に普通ポットは株作りに好条件となりました。11 月上旬から出荷が始まり、厳寒期の低温(a)・寡日照により４月上旬までは大きな山がなく出荷されました。４月の高温(c)で成り込んでいた果実の着色が急激に進み、４月中旬以降は大きな出荷の山ができました。定植後～厳寒期前の株作りが出来たことで収量は向上しました。

○1月までの生産量が減少したブロッコリー(平成 22 年定植)

8月の高温により移植苗の枯死が一部でみられました。定植後の生育は9～10 月の高温(f)により茎葉の生育は進みましたが、花蕾の生育が重なり 11 月～12 月上旬に出荷が集中しました。生育の前倒し、さらに、1月の低温(a)により12 月下旬から1月までの収穫量が減少しました。2月下旬になると気温の上昇により出荷量が増加しました。(出荷量は対前年比 86%)

○昨年より夏季の生育収量が回復したアスパラガス

春芽は、1月の低温等により出荷始めが遅れました。夏芽は5～6月の日照不足(k)により出荷量の伸びが鈍くなりましたが、7～8月は前年よりも高温が厳しくなかったこと等により、昨年より7～8月の出荷量が増えました。8月中旬以降の多雨(j)により病勢が拡大し、その後の収量が低下しましたが、栽培面積が増加していることもあり年間出荷量は前年比 125%でした。

＜花き＞

○春先の低温寡日照下でも共販量が増大したキク

露地キク(7～8 月出し)は定植直後の低温寡日照により、1 週間～10 日の生育遅延が見られましたが、6 月(出蕾期)の低温(d)により、出荷が早まりました。9 月出しの作型は、8 月下旬の低温により、出荷時期が早進化しました。病害虫については、ヤガ類、さび病の発生が見られました。ごく一部でさび病の多発により出荷が低迷しました。共販量では嘉穂が前年並みの約 480 千本、直鞍が出荷規格の見直しや計画的な生産推進などにより 223 千本(昨年比 153%)、金額ベースで 1,000 万円を超え、過去 7 年間で最高となりました。

○ 安定出荷となった秋出しトルコギキョウ

秋出しトルコギキョウは管内の 4 部会で生産されています。今年は８月中旬の日照不足とその後の高温・高日照によりチップバーンの発生が目立ちましが、一方で近年問題となっている立枯れ病による被害は減少傾向にありました。

管内では計約 680 千本が出荷され、県内出荷量の約３割を占めました。特に４部会の中でも、若手生産者が加入した JA 嘉穂本所で、共販出荷量の伸びが著しく、前年比 247%（約 130 千本）となりました。

○品質が安定したシンテッポウユリ

主な定植時期は4月中～下旬で、定植作業～初期かん水は順調に行われました。4月末の遅霜によって外葉枯れが発生し、一部の雷山2号で初期生育が遅れました。他品種を含め全体的に生育が遅延しましたが、7月中旬以降生育が進みました。

薬剤防除の徹底や、豪雨被害がなかったこともあり、葉枯病・疫病の発生は少なくなりました。盆需要に集中して出荷できたため、共販量は 173 千本(対前年比 113%)と増加しました。

＜果樹＞

○順調に出荷量が増えたイチジク

露地栽培では、春先の少雨乾燥(h)により芽立ちが不揃いとなり、その後の

新梢伸長、着果時期がバラツキました。露地「とよみつひめ」の出荷開始は、前年より 12 日早い8月８日で平年並となり、10 月以降も気温が高め(f)で推移し終盤の成熟が比較的順調に進んだため、収量を確保することができました。その結果、数量は36t(対前年比 164%)と増加し、販売金額も約 2,800 万円(対前年比 170%)で過去最高となりました。

○単価は維持できたものの収量が大幅に減少したブドウ

加温・無加温栽培では、初期生育は前年より7日程度遅く、果粒肥大は5～6月の低温寡日照(d,k)によりやや小さくなりました。トンネル・露地栽培では、初期生育は前年よりやや遅く推移し、肥大初期の低温寡日照により小粒傾向となりました。着色は、梅雨明けが早くて(e)好天であったこと、小房、着房数の減少により良好となりました。ブドウの単価は対前年比 104%と増加したものの、出荷量は対前年比 66%と大幅減となりました。

○冷蔵柿の出荷量を確保できたカキ

発芽、展葉などの初期生育は、3～4月の低温(b)により、前年より7日程度遅くなりましたが、満開期は、5月上旬以降の気温上昇により、前年並となりました。「富有」の含核数は多かったため、生理落果は少なくなりました。秋期が高温(f)で降雨が多く、果実は順調に肥大しましたが、収穫期にはヤワ果の発生が多くなりました。その結果、カキの出荷量は対前年比 113%と増加し、単価は対前年比 86%とやや低く推移しました。

○当初計画を下回ったナシの出荷販売

開花期は好天に恵まれ結実はほとんどの品種で平年並み～良好であったが、開花前及び開花期以降の低温(d)、日照不足(k)等により、開花期が遅れ、果実初期肥大が不良となった。果実品質については、すべての品種で糖度は良好であった一方、果実肥大は平年に比べ不良となり、秀品率は平年並でした。販売量は対平年比 75%と少なく、単価は平年比 111%と高単価で推移しました。

＜畜産＞

○和牛繁殖

和牛繁殖雌牛の飼養頭数は、前年の532頭より2割増の634頭となり、昨年に引き続き県下一となりました。飼養農家戸数も前年の 23 戸より2戸増の 25 戸となりました。

生産された肥育素牛は、前年の佐賀県、熊本県の家畜市場に出荷されるとともに、一部は管内の肥育牛農家に地域内流通しています。

○酪農

飼養戸数は前年の 52 戸と同じでしたが、飼養頭数は 2,165 頭から 2,111 頭に減少しました。生乳出荷については、昨年実績約 13,000トンに対し、今年目標は8%減の約 12,000トンと減産が継続しています。

生産基盤の強化を図るため、自家育成による後継牛の確保の取り組みが進んでいます。計画的な自家育成牛確保の方法として、雌雄判別精液の活用も進んでおり、育成牛率も 37%から 39%へ上昇しています。

～これからも小野谷の農地はみんなで守っていく～

小野谷営農組合（嘉麻市）は、将来にわたって地域農業を支える経営体となるため、22年秋から10ヶ月間法人化の検討を重ね、23年6月に「農事組合法人　小野谷の郷」を設立しました。
管内では8番目の土地利用型組織法人で、園芸品目や加工部門の導入を進めており、中山間地域の水田農業を担う経営体として期待されています。

○

小野谷営農組合は、設立から3年を経過する中、組合員の高齢化や農機具の更新、資金繰りなどの不安が増していました。
そこで、将来にわたって安定した経営基盤を整えるためには法人化が必要だと判断し、準備委員会等を通じて協議を重ねました。

○

小野谷営農組合（平成 19 年設立／34 戸）

○

（1）法人化検討会～組合全員会議
法人経営の基礎について、法人化検討会（計5回）で学習しました。普及指導センターからは、法人化のメリット・デメリットや任意組合との違い、法人経営の実例等の情報提供を行いました。
検討会で「法人化は妥当」と判断したため、22 年 12 月の営農組合全員会議で準備委員会の設置や具体的スケジュール等を提案し了承されました。
（2）法人化準備委員会～設立総会（写真1）
準備委員会では、法人設立へ向け定款や組織体制、既存組織の財産分配等について具体的な検討を行いました。特に、税務・労務については税理士など専門家にも相談しました。
最終的には、7名の役員、4部（総務・企画・生産管理・機械管理）体制、39 名の組合員にて、23 年6月5日に設立総会が開催されました。

○

23 年度は農業経営アドバイザー派遣事業を活用して、先進法人経営を学んでいます。
主な経営品目は水稲・大豆ですが、法人化以前からニンニクやシンテッポウユリなど園芸品目にも取り組んでおり、今後はタカナ面積の拡大や味噌作り等、更なる複合化・多角化を目指しています。

（2）地域を担う新しい農業者の育成を目指して

～新規就農支援プログラムの体系化と実践～

農業関係高校生や県農業大学生、新規就農者に対し、各段階に応じて農業体験やセミナー等の支援プログラムを実施する中で、高校生には農業の魅力を、農大生には就農への誘導を、新規就農者には確実な定着を推進しました。その結果、23年度は農業関係の大学への進学9名、新規就農者7名を確保しました。

○背　景

地域を担う新しい農業者を確保するには、将来の担い手候補に対して積極的にアプローチし、担い手候補がスムースに就農定着できるような支援プログラムの体系化が必要でした。支援プログラムは、市町村等関係機関と農業者リーダーで構成する飯塚地域新農業人応援会議により実践しました。

写真１　高校生セミナー

○対象概況

鞍手竜徳高校、嘉穂総合高校生	80 名
福岡県農業大学校学生	10 名
新規就農者（就農1年～4年　）	28 名

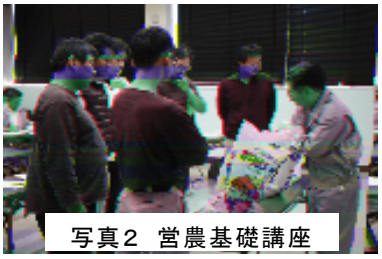


写真２　営農基礎講座

○活動内容及び成果

セミナー参加高校生 20 名の 95%が農業への関心の高まりを示し、25%に就農意識が芽生えました。また、農大等農業関係校に9名が進学しました。

県農大 1 年生8名が農家留学研修に参加し、うち5名が地元就農を希望しています。

就農1～4年目の農業者の 40％が主体的に経営に参画し、5名が認定農業者となっています。

新規就農者の 65%がUターン就農で、新規学卒が 25%、新規参入が 15%を占めています。

〈担い手の掘り起こし〉　〈就農誘導〉　〈就農定着支援〉

農業関係高校
・農業体験
・現地セミナー
・出前講座

→

農業大学校
・農家留学研修
・個別相談

→

就農 1～4 年目
・新規就農者つどい
・営農基礎講座
・先進農家視察
・個別相談

支援プログラムのフロー図

○今後の取り組み

Uターン就農や他産業からの新規参入者も含めた支援システムの構築を検討します。

～夏期の高温による米の1等米比率低下の防止に向けて～

平成21年度より高温耐性新品種「元気つくし」の普及拡大を推進し、昨年の猛暑下での好成績もあって、23年度は504haと大幅に面積が拡大しました。1等米比率は、いもち病が発生しましたが、約90％と高い数値となりました。

近年、温暖化により水稲の登熟期に当たる8～9月の気温が高くなり、米粒の充実に悪影響を及ぼすことで、収量や品質の低下を招いています。

管内では、県育成水稲品種「元気つくし」について、平成 20 年度に試験栽培、平成 21 年度より一般栽培を開始しましたが、管内産米の1等米比率向上のために、より一層の面積拡大と安定生産技術の確立が求められています。

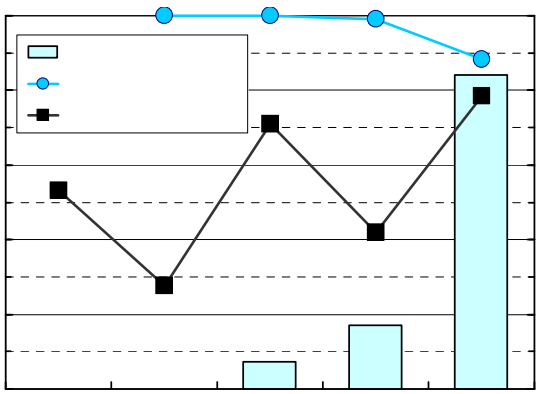
水稲栽培農家数・面積　　：3,897 戸、 4,687ha（H23）
「元気つくし」生産者数・面積　：　822 名、　504ha（H23）

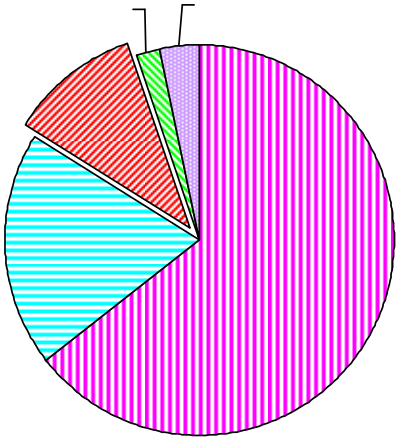
JAや部会を通じた作付け推進や現地実証ほの設置・栽培講習会の開催・栽培情報の提供等を行い高品質安定生産と面積拡大に取り組みました。

その結果、「元気つくし」の栽培面積は 504haに拡大、1等米比率は2年連続で約 90％となりました。管内の水稲作付面積の約1割を占め、「夢つくし」「ヒノヒカリ」に継ぐ品種となっています。（図1，図2）

今後とも、管内水稲作付面積の 2 割を目標に、「元気つくし」の面積拡大を図ります。

そのためにも、いもち病対策を中心に、安定生産技術の確立を図っていきます。





（4）実需者の求める高品質の「ちくしW2号」を目指して

○背　景

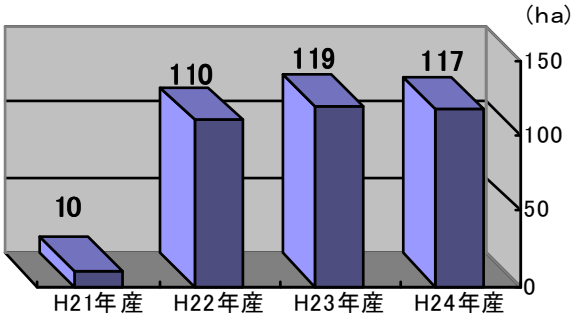


図1　JA直鞍ちくしW2号の栽培面積

○対象概況

○活動内容及び成果

○今後の取り組み

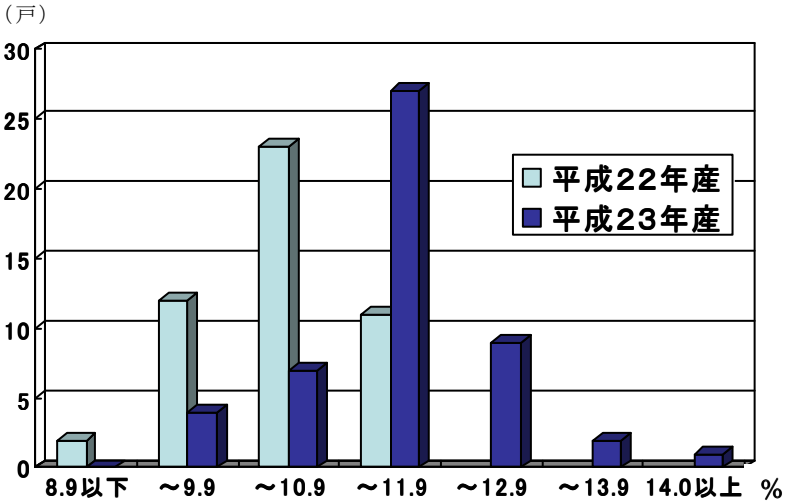


図2　小麦「ちくしW2号」のタンパク質含有率(%)

（5）大豆の安定生産技術の確立

～大豆低収地域での収量向上を目指して～

JAふくおか嘉穂管内の大豆の収量向上を図るため、大豆不適作地の飼料用米やWCSへの転換等を推進するとともに、収量向上栽培技術の実証、栽培管理の徹底により、大豆の収量は向上してきています。

○背　景

管内の大豆については近年、収量が県平均収量の 50～60％程度と低迷しました。特に、JAふくおか嘉穂管内では、生産ほ場でのブロックローテーションがほとんど行われずに、転作のため条件の悪いほ場での連作となっている事や、栽培管理の不徹底等が原因で、大豆の収量向上が課題となっています。（図１）

○対象概況

JAふくおか嘉穂管内大豆生産者数・面積 ： 47 戸、232ha（H23）

○活動内容及び成果

平成 21 年度より、大豆収量向上技術実証ほを設置し、播種法や施肥法について検討、栽培管理技術の実演・展示を行い、生産者への栽培管理の徹底を図りました。

また、営農組合の育成を通して栽培管理の共同化・徹底や、条件が悪いほ場については、飼料米やWCSへの転換を推進しました。

その結果、作付面積は減少したものの、収量は、向上してきています。（図２）

○ 今後の取り組み

今後とも、県平均収量を目標に、大豆の収量向上を図ります。

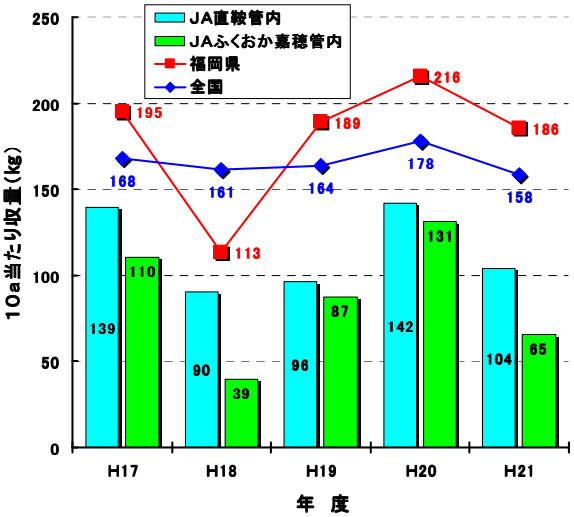


図1　大豆10a当たり収量の推移

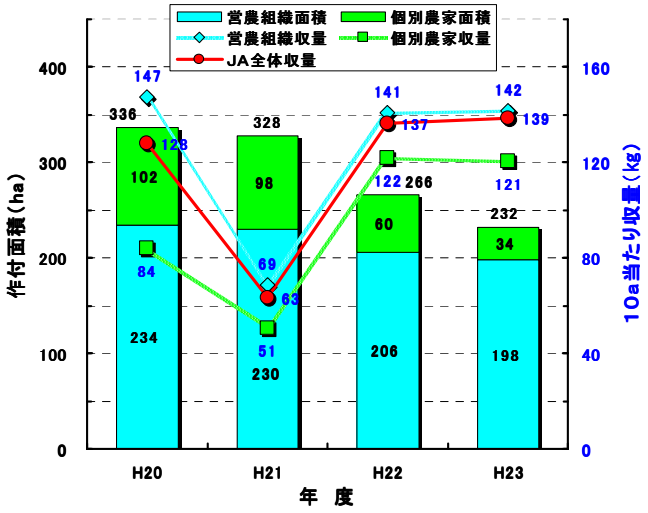


図2　JAふくおか嘉穂管内大豆作付面積と収量の推移

～生産履歴記帳による消費者との信頼関係強化～

管内すべての直売所において生産履歴記帳・提出の取り組みが合意され、出荷農産物の生産履歴記帳・提出および直売所でのチェック体制が確立されました。

○

従来、JA等生産部会での生産履歴記帳・提出、確認は指導体制が確立しており徹底されていましたが、農産物直売所での対応はまちまちで体制が確立されていませんでした。

○

管内支援直売所　21店舗　2,653名

（地区別内訳）	地区名	店舗数	会員数
	直　鞍	12	1,338
	嘉　穂	9	1,315

○

消費者へ直接販売している直売所の農産物の信頼を高めるため、筑豊地区直売所連絡協議会で生産履歴記帳の取り組みが合意され、管内の直売所店長・組合長会議を2年間毎月開催し記帳推進を行いました。

生産履歴記帳・提出の理解は得られ、全体的に提出率は向上し、消費者が直売所に求める「安全・安心」農産物の提供

(7)イチゴの早期作型の重点化で収量が向上

～早期定植による厳寒期を乗り切る株づくりで収量アップ！～

イチゴ「あまおう」の早期作型の推進と収穫前の株づくり、厳寒期の草勢維持管理の徹底により、管内の系統共販出荷量が前年対比118%、目標収量が3.5t／10aを達成した生産者数が14戸増え、うち2戸は部会で初めてとなる5t/10a以上となりました。

○背　景

管内は冬場に低温寡日照となる厳しい気象条件の地域であるため、収穫開始までに充実した株づくりができず、着果数の減少や矮化による生育遅延などにより、収量が低迷していました。

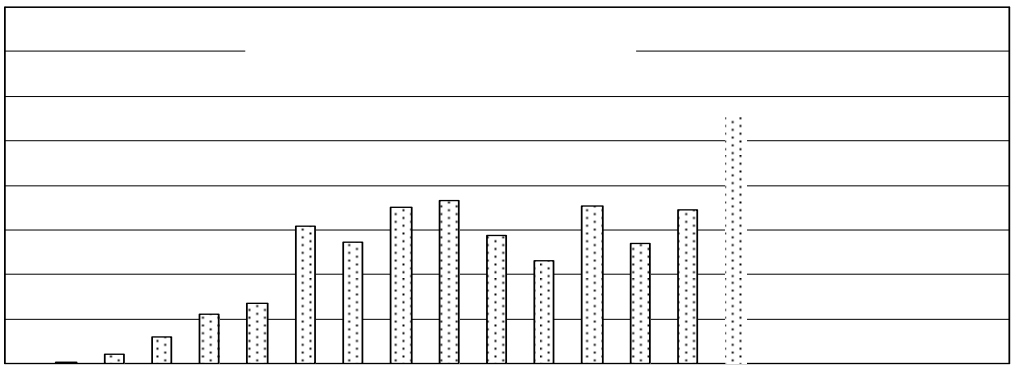
○対象概況

JA直鞍	31 戸	7.4ha
JAふくおか嘉穂	55 戸	9.1ha

○活動内容及び成果

早期作型の推進と講習会や個別巡回による厳寒期の草勢維持管理の徹底、毎月管理情報の発信を行いました。

・管内の系統共販出荷量 2,895kg/10a で、前年対比 118%となりました。(図 1)
・個別収量目標 3.5t/10a 達成生産者数が 19 戸で前年対比 14 戸増となりました。
・2 戸は部会で初めてとなる 5t/10a 以上となりました。



○今後の取り組み

親株本数確保による適期採苗を推進し、大苗づくりによる更なる収量の向上を目指します。

(8)新規野菜産地の育成および定着

～複合経営における野菜品目の導入～

新規野菜産地の育成・強化を図るため、アスパラガス、ホウレンソウを推進しました。個別相談会では経営シミュレーションを活用して複合経営の収益性、労働時間の過不足をグラフで示しました。その結果アスパラガスは28戸、3.4haまで拡大されました。

○背　景

ブロッコリー等の組み合わせ品目としてアスパラガスの面積、戸数が近年急増しており、新規栽培者の早期技術習得による野菜産地の育成・強化が急務です。また、JA ふくおか嘉穂では、カボチャ、ホウレンソウの作付け推進が平成 21 年に開始され、これらの新規野菜産地の育成・定着を図ることで、農家の野菜複合経営を確立する必要がありました。

○対象概況

管内野菜

JAふくおか嘉穂	アスパラガス	15 戸	180a、カボチャ 32 戸　460a
	ホウレンソウ	15 戸	60a
JA直鞍	アスパラガス	10 戸	117a

○活動内容及び成果

(1)新規栽培者に対して、栽培暦を基にした栽培講習会や、生育診断・肥培管理について個別巡回による重点支援を行いました。その結果、新規栽培者が定着し、野菜産地が育成・強化され、アスパラガスは管内合計で 28 戸、336a に拡大しました(写真1)。

(2)野菜複合経営確立を図るため、24 名の生産者に対して経営相談会を行いました(写真2)。現状の労働時間をグラフ化し、既存品目拡大、新規品目導入を提案しました。その結果、園芸栽培面積は 13.5ha から 18.0ha に拡大しました。

○今後の取り組み

栽培年数が短い生産者への重点支援、既存の生産者に対する経営相談会を継続し、野菜産地の育成・強化、新規野菜産地の育成・定着に努めます。

写真１　ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ１年目のﾊｳｽ

写真２　経営相談会の様子

～元気をとり戻そう!日吉のキク～

中山間地のキク産地において、優良品種選定や生産性向上及び産地PR強化の支援を行いました。具体的には、①出荷規格見直し②品種分析による生産課題の抽出や生産及び販売データの解析、③個別目標策定を支援して共販金額が過去8か年で最高となり、生産意欲の機運が高まっています。

○

若宮市三ヶ畑地区では中山間地の条件を生かしたキク生産が行われていますが、限られた生産圃場での生産性の低迷とロット確保による販売力強化の推進が大きな課題でありました。

そこで、これらの課題を解決するため、現地検討会や個別巡回指導を通じて過去3ヵ年の出荷データと生産者から聞き取り調査した栽培状況アンケートを基に品種分析を行った。販売に有利な品種選定について、①産地分析と個別診断を示して生産・販売上の課題解決策(技術指導、出荷規格の見直し等)の提案、②個別に生産目標策定を支援しました。

○

JA 直鞍日吉花き共販組合(8名、145a)

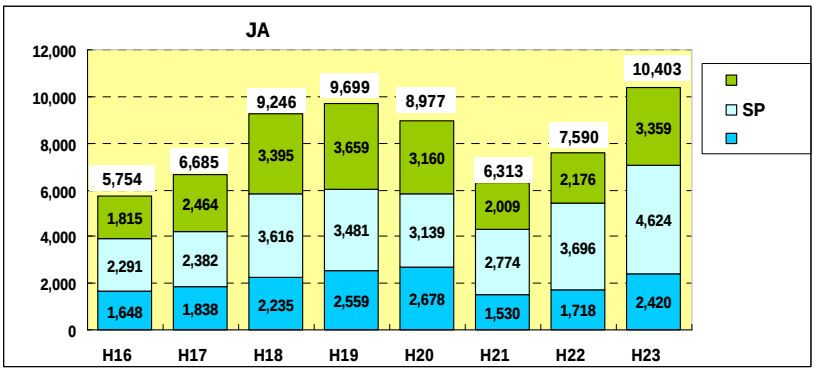
○

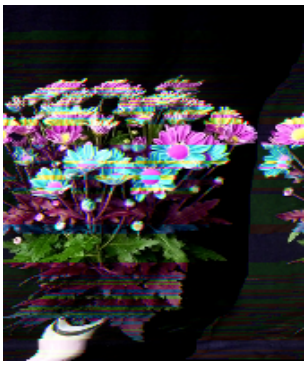
厳しい販売環境の中で、平成 23 年の出荷実績は昨年を30%上回り、ほぼ生産目標を達成した。また、生産性低迷の技術要因についても明らかになり、個別指導の指標作成に有益な情報が得られました。(図1)

対象農家に対して技術的な個別課題と出荷品種の販売実態が明らかになりました。この事により生産者の生産改善意欲の動機付けとなりました。また、JA 及び生産者に対しても今回の出荷実績データの分析結果と活用方法について共感を得る事ができ、協力体制が構築できました。

○

生産課題については、個別面談会などを通して技術面での課題解決を図ると共に、販売力強化対策として、PR 紙作成や優良品種の選定、特徴あるキク商品開発に向けて支援をしていきます。(写真1)





(10)カキ農家の経営安定

～栽培技術向上による収量増で冷蔵柿入庫量を確保～

摘蕾、摘果を重点的に指導したことで、果実の肥大が安定し、カキ部会全体の出荷量は 300tとなりました。そのうち、生果より2倍高単価の冷蔵柿入庫量は、前年並の 220tを確保しました。
また、イチジクを組み合わせた複合経営が9戸に増え、カキ農家の経営安定への動きが定着しつつあります。

○背　景

平棚栽培が部会面積の 78%を占めるとともに、園地流動化により、栽培面積の維持が図られています。部会出荷量全体の 75%を冷蔵柿で販売し、単価を確保しています。

○対象概況

JAふくおか嘉穂柿部会 22 戸　24ha

○活動内容及び成果

冷蔵柿の入庫量を確保するため、部会平均収量 2.0t/10aを目標とし、低収農家の収量向上を進めるとともに、農家経営安定のために複合経営化を推進しました。

摘蕾、摘果及び適期防除の重要性について、技術情報資料や栽培暦等を示しながら、講習会や個別巡回により、栽培管理指導を行いました。その結果、

- 摘蕾、摘果の実施により、果実肥大は前年より良好に推移しました。(図1)
- 全体の出荷量は 300tを確保しました。そのうち冷蔵柿入庫量は 220tとなりました。(写真1)
- カキとイチジクの複合経営は9戸になりました。

写真1　出荷前の冷蔵柿

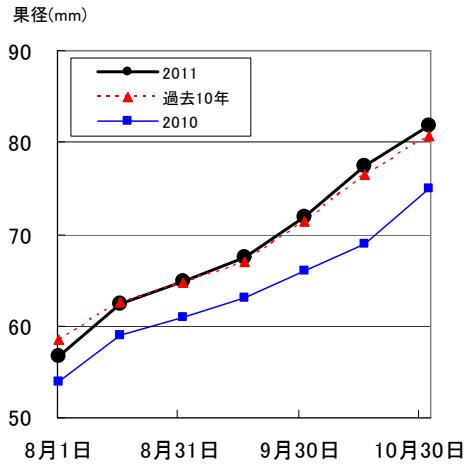


図1 「富有」の果径肥大の推移

○今後の取り組み

薬剤の樹幹塗布等フジコナカイガラムシの新しい防除法が開発されたため、産地での試験を行うとともに、県育成の有望新品種「秋王」の展示ほを設置し、管内への導入拡大を推進します。
また、カキとイチジクの複合経営への誘導については、継続して進めます。

（11）優良和牛肥育素牛の産地確立

○背　景

○対象概況

○活動内容及び成果

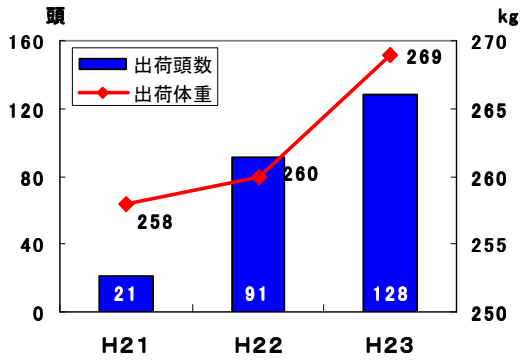


図１　出荷頭数と出荷体重の年次推移

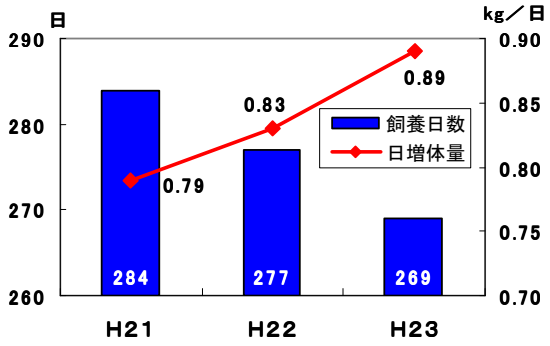


図２　飼養日数と日増体量の年次推移

○今後の取り組み

（12）各種表彰（国・県）

（有）グリーンハート安田花卉

中山間地の花卉経営に栄冠!!

― 花き技術・経営コンクールで農林水産省生産局長賞を受賞 ―

受賞された安田克徳・節子夫妻

昨年の 12 月から本年 2 月にかけて実施された第 20 回花の国づくり共励会花き技術経営コンクール審査において、宮若市の(有)グリーンハート安田花卉の安田克徳・節子夫妻が農林水産省生産局長賞を見事受賞されました。

当コンクールは全国から応募があった中から、技術や経営内容に優れた生産者を審査表彰するもので、長年培われた技術・経営改善の足跡と今後の活動方針、地域活動の貢献度等が評価されるものです。

安田克徳氏は昭和 50 年に就農、54 年に節子さんと結婚した後は家業であった花木経営を継承。「彩どり花木」をコンセプトに経営基盤を強化する目的で導入した露地ギク経営を経て経営規模を390a まで拡大しました。平成 15 年に法人化を行い、企業経営としての花木生産を目指しています。

また、多様な需要に応えるための生産体制を整え、県内では類のない経営モデルを作り上げました。その他、花木の魅力を多くの人にも伝えるための商品づくりに努力して高い市場評価を受けており、地域活動にもその成果を反映させています。こういった 30 年以上にわたる生産及び経営努力が今回の受賞につながりました。

普及指導センターとしても、今後の厳しい時代を生き残る「新しい雇用型花き経営モデル」として支援をしていきます。

グリーンハート安田花きの「春」

（株）地黄卵

（株）地黄卵が全国20代表として事例発表

― 第60回全国農業コンクール全国大会で優秀賞を受賞 ―

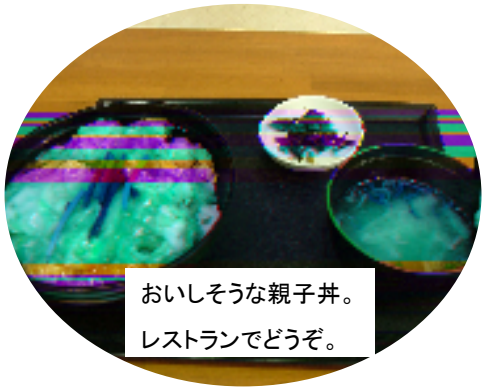
受賞祝賀会でのご家族

7月14日、和歌山市民会館にて第60回全国農業コンクール全国大会が開催されました。本県代表として（株）地黄卵（宮若市）の荒牧社長が自身の採卵鶏経営における「数々の挑戦とその成果」について事例発表されました。

審査の結果、惜しくもグランプリの毎日農業大賞は逃しましたが、「優秀賞」を受賞されました。

大会を終えて荒牧社長は、「他の参加者のすばらしい経営内容を学び勉強になった。まだまだ我が社も頑張らないかん！」と、今後のレストラン経営の成功に向け、新たな決意を持たれていました。

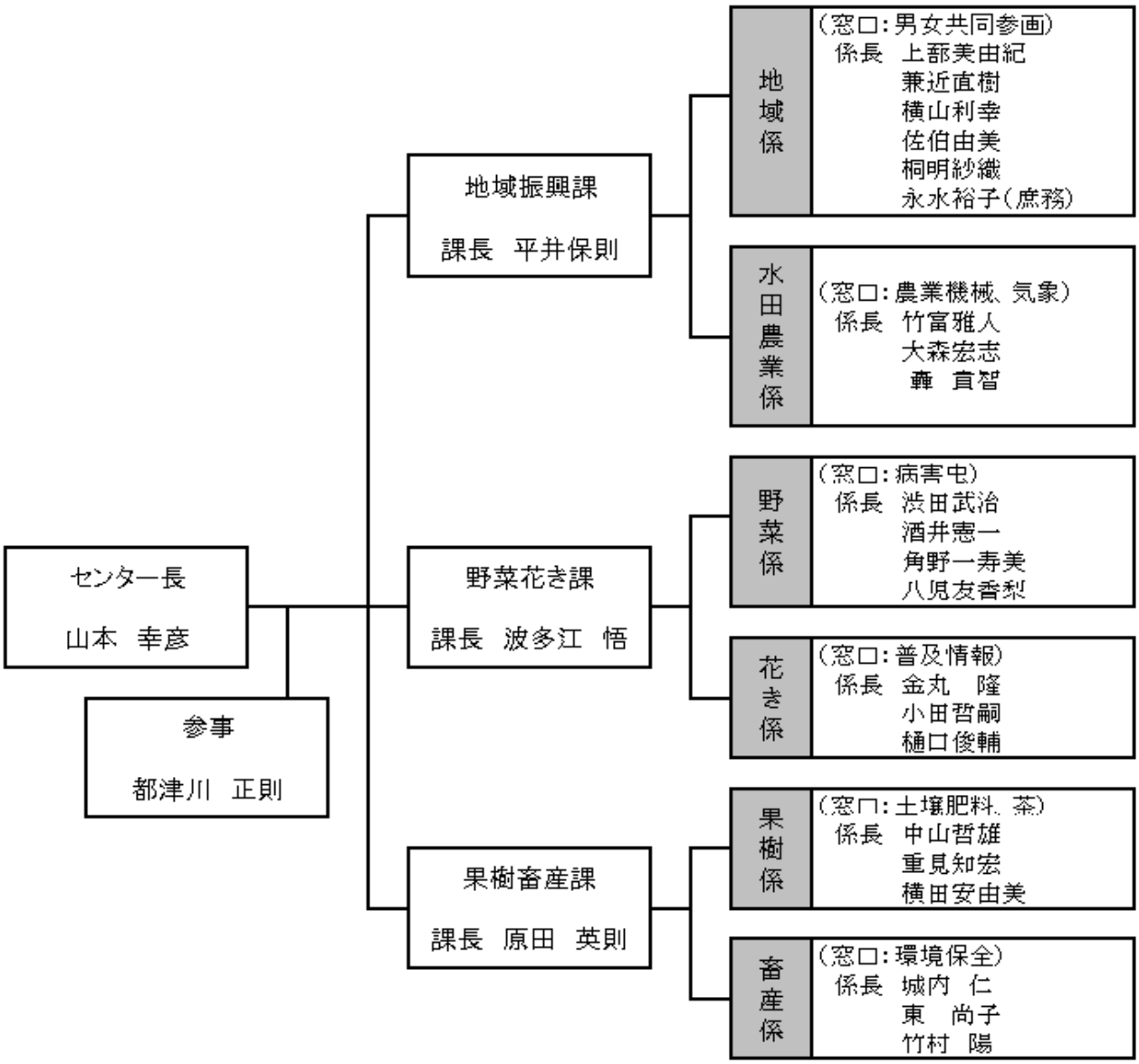
開店したレストラン「五反田亭」


おいしそうな親子丼。
レストランでどうぞ。

このように普及指導センターは、創意工夫、先進的な取り組みにより優れた経営成果を上げられている農業者に対し、当コンクールなどの各種表彰事業への参加支援を今後も行って参ります。

各種表彰（国・県） 一覧　（1月～12月）

表彰事業名	受賞者・組織	受賞内容	市町名
第 20 回花の国づくり共励会・花き技術・経営コンクール	有限会社 グリーンハート安田花卉	農林水産省生産局長賞	宮若市
第 60 回全国農業コンクール	株式会社 地黄卵	優秀賞	宮若市
平成 22 年度福岡県大豆作経営改善共進会	川村光一	特別賞 （全国農業協同組合連合会福岡県本部長賞）	小竹町
第 18 回福岡県農林水産まつり	旬菜ほなみ 代表　松永和子	県知事賞 （農産の部）	飯塚市
	JA ふくおか嘉穂ブロッコリー部会	優秀賞 （園芸の部）	飯塚市
	農事組合法人 小野谷の郷	優秀賞 （地域集団の部）	嘉麻市
福岡県花き品評会・夏秋咲きギク・露地部門	村瀬嘉明	農林水産省生産局長賞	飯塚市
	萩尾邦広	花あふれるふくおか推進協議会会長賞 （露地部門）	嘉麻市
	豊田　武	花あふれるふくおか推進協議会会長賞 （施設部門）	嘉麻市
	大賀安興	福岡県花き市場協議会会長賞 （技術・ほ場の部）	飯塚市
筑豊地域花き生産者連絡協議会トルコギキョウ立毛品評会	貞光孝宏	県知事賞	直方市
第7回ふくおか良質堆肥コンクール	農事組合法人 穂坂牧場	県知事賞 （大家畜の部）	飯塚市
第13回福岡県乳牛共進会 第2部　未経産の部	森田　勉	優秀賞 （ふくおか県酪協組合長賞）	直方市
第5部　自家産の部	松野竜大	優秀賞 （ふくおか県酪協組合長賞）	直方市
第 40 回西日本地区肉用牛交雑種共進会	赤崎和徳	金賞	嘉麻市



（ア）プロジェクト班

嘉穂園芸農業振興推進班、直鞍農産物直販拡大推進班

（イ）センター内運営事項による分掌（推進班）

水田農業経営力強化推進班、経営体育成推進班、

担い手育成推進班、情報活用推進班、食の安全推進班

（2）現地実証・展示ほ一覧

No.	課題名	内　容	場　所	事業主体
1		2		
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15		R 266		
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24		7		
25				
26		4		
27		20		
28				
29	2			
30		11		
31				
32				
33				
34				
35				
36			JA	
37				
38				
39				

(3)平成23年度　普及指導員調査研究実施一覧

No	課　　題　　名	関係部門	担当者
1	インショップにおける消費者ニーズに対応した出荷体制	地域	上薗 美由紀
2	第3者経営継承事例の検証	地域	兼近 直樹
3	集落営農組織の組織化・法人化支援手法	地域	横山 利幸
4	集落分析による地域農業支援方策の策定	地域	佐伯 由美
5	ラーメン用小麦「ちくしW2号」のタンパク質含有率向上のための省力施肥体系	水田農業	竹富 雅人
6	飼料用米における水稲育苗箱全量施肥法	水田農業	大森 宏志
7	ブロッコリーにおける根こぶ病対策	野菜	渋田 武治
8	アスパラガスの土壌診断に適した土壌採取法	野菜	酒井 憲一
9	イチゴ「あまおう」育苗における鉢上げ時期の違いが苗質に及ぼす影響	野菜	角野 一寿美
10	雇用型花き経営における労働生産性及び収益性評価の手法開発	花き	金丸　隆
11	トルコギキョウにおける土壌病害対策の技術評価	花き	小田 哲嗣
12	ダリア栽培における厳寒期収量向上のための摘心方法	花き	樋口 俊輔
13	ブドウ「シャインマスカット」の適正果房	果樹	中山 哲雄
14	「とよみつひめ」加温栽培における着色向上対策	果樹	重見 知宏
15	優良肥育素牛の安定生産技術の検討	畜産	城内　仁
16	肥育牛経営における効果的な飼養管理改善指導手法	畜産	東　尚子
17	褐毛和種肥育牛への飼料米給与による肉質向上効果	畜産	竹村　陽

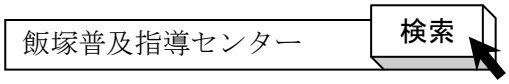
（4）現地活動情報一覧

No.	タ イ ト ル	月 日	執筆者
1		4 12	
2		4 18	
3		5 30	
4		5 31	
5		6 3	
6		6 8	
7		6 10	
8		6 10	
9		6 16	
10		6 24	
11		6 29	
12		6 30	
13		7 21	
14		7 21	
15	20 60	7 22	
16		8 3	
17		8 3	
18	50	8 5	
19		8 24	
20		8 29	
21		9 7	
22		9 29	
23		9 2	
24		9 22	
25		10 4	
26		10 7	

27		10　24	
28		11　1	
29		11　1	
30		11　1	
31		11　9	
32		11　14	
33		11　30	
34	7	12　5	
35		12　5	
36		12　5	
37		12　6	
38		12　6	
39		12　6	
40		12　9	
41		12　19	
42		1　10	
43	part2　JA	2　1	
44		2　10	
45		2　14	
46		2　29	

飯塚普及指導センターのホームページがリニューアルしました！

上記の「現地活動情報」も詳しくはホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。



HP：http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/iiduka.html

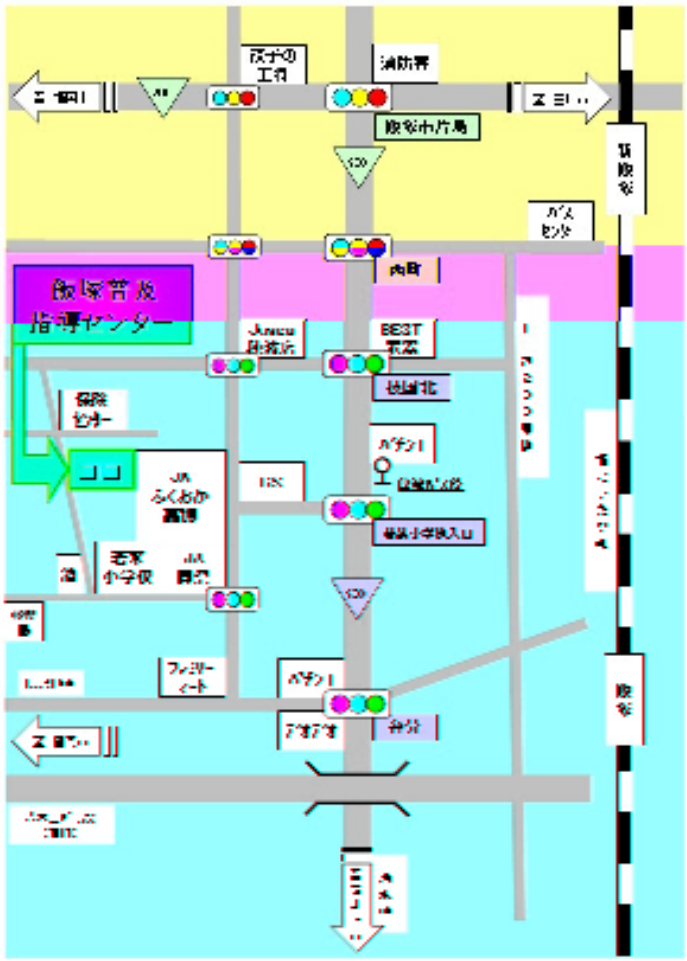
スマートフォンでは裏表紙の QR コードからもご覧になれます。

(5)飯塚地域担い手･産地育成総合支援協議会活動実績

部会		課題・計画	成果・実績
担い手育成			
農業経営指導			
生産振興	普通作班		
			500 a
		2	
	野菜班		
	花き班		BA( )
			10cm
	果樹班		
	畜産班	スーダングラス高消化性品種の活用による飼料夏作の生産拡大	

文書番号			
分類番号	所属コード	登録年度	登録番号
PA	4703419	23	0003

周辺地図



庁舎への交通アクセス

車

八木山バイパス終点より約 1.2km
「若菜小学校入り口」交差点より約 750m

JR

福北ゆたか線飯塚駅下車
タクシー約 10 分

西鉄バス

穂波バス停より徒歩約 10 分
「若菜小学校入り口」交差点より約 500m

ホームページはこちらから

福岡県飯塚農林事務所飯塚普及指導センター

〒820-0089　福岡県飯塚市小正319-1
TEL:(0948)23-4154
FAX:(0948)29-4866
E-mail:iizuka-dlc@pref.fukuoka.lg.jp
HP:http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/iiduka.html